



海外レポート

## ジャワの都市，考えるままに

紙野桂人\*

昨年（昭60）の春から秋にかけて、大阪大学は全学10チームから成る南太平洋学術調査隊をパプアニューギニア、フィジー諸島、インドネシア諸島など南海の島々に向けて送り出し、現地の学者・研究者との協力体制のもとに、自然・人間・都市・社会の各ジャンルにわたって総合的な科学のメスを入れる試みを行った。

小生は、その工学部チームの主査として学内外の若手研究者と共に、インドネシア共和国・ジャワ島における伝統的都市について、居住環境、生活行動、生活意識、ならびに帆船文化に関する実態調査を行って来た。

この調査の成果については、昨年10月に工学部において中間報告会を行ったが、まだ集約作業の途中でもあるので、今後さらに機会を設けて公表して行きたいと考えている。そこで、本稿はむしろ調査そのものから少し離れて、小生がジャワ滞在の期間を通じて得た実感について思いつくままに記させていただくこととする。

## 街の朝から

ジャカルタの安宿で、前日の日本からの旅づかれもあってぐっすり寝込んでいた私は、猛烈な聴覚の刺激によって突然眠りからおさばさせられることとなった。まだ日の出から間もない6時前にである。

いったい何が起きたのか？ 一瞬とまどった後に、すぐ事態を納得させられることとなった。

イスラム教徒の朝のお祈りの時間だったのである。

その朗々たる大音声は、日本の住宅街の朝の物音のひそやかさに慣れている私に対して、こ

れからの毎朝への覚悟を迫るものであった。

ジャカルタにかかわらず、ジャワの街の朝はどこでも早朝からにぎやかである。お祈りの声はもちろん、鶏のときの声が部屋の前後左右、時には頭の上からもけたたましく鳴って来る。人間も多いので人の叫び声も高いし、物売りの合図も聞こえる。人並をかき分けて走る乗合バスのエンジンの音も相当うるさい。それらがひとつひとつになって街全体が声をだして動き始めている感を与える。思えばこれがアジアの都市の本来の朝だったわけである。これにひきくらべて日本の都市には、いま、通勤者の無言の行列がひたすら都市に向かって進んで行く言葉の少ない刻がある。

陰と陽、この対称的な現実を目覚めさせられた朝であった。

## 昼の街から

数年前、インドの都市を訪問した時、その表通りの路上に溢れる人・馬・牛・象・駱駝・羊・豚・自転車・バイク・トラック・バスなど新旧ごちゃまぜの交通の壮観に圧倒された経験がある。インドではかくもまぜこぜの交通が道いっぱい広がって、われ勝ちに流れるのであった。交差点には信号が無いので、そこで流れと流れがぶつかり合って、例えばバスと象と自転車と豚が睨み合って立ちすくむような瞬間がしばしばやってくる。どうなることかと思っで見ている眼の前で、やがて泥の塊が水に融けるかのように渋滞が消えてまた自然な流れが続いて行く。

それは、類別され制御された近代都市の道路交通とは将に対極的な現象であった。

ジャワの都市交通はいま圧倒的に自動車主流の時代である。そのなかで馬車とベチャ（輪タク）が根強く生き残って、都市行政に将来の選

\*紙野桂人 (Keijin KAMINO), 大阪大学, 工学部, 建築工学科, 教授, 工学博士, 建築計画学・都市計画学

扱を迫っているのが現実と言えよう。この点では近代化への過渡期にあると言ってしまえばそれまでのようにも思う。ジャカルタの街でお会いしたある日本の学者は、「この都市は自動車の上から見ていると綺麗に見えるけれども、歩いて見るとこれほど危なっかしい所はないと常々思う。」と話しておられた。実際に街を歩いてみると、自動車交通の激しい道路であるのに信号がない。各種の自動車とベチャなど速度の違う交通が入り混じって流れる間を縫っての道路の横断は、命を張ってやる感じである。街路樹はオランダ統治時代以来の名残りで立派に育っているが、その反面、歩道が並木に占領され、草も生い茂り、ところどころ陥没もあって歩くのに油断ができない。この事情は他の都市でも大なり小なり変わらない。このような都市環境を背景にして、首都ジャカルタではベチャを交通渋滞の元凶と判断して1年以内にその廃止に踏み切ると言う。これは近代化への方向を突き進む選択である。これに対して、伝統的都市のジョクジャカルタ市では、その中心街であるマリオボロ通りで、遊歩道とベチャ専用通路を整備してベチャを交通手段として支持する方向を打ち出している。これはアジア的な都市の個性を強め守って行こうとする選択である。

どちらの選択がより良い都市の将来に結びついて行くのか、興味深い所である。

ジャワの都市交通には、もうひとつ興味をそそることがある。それは乗り合いタクシー、または小型バスを含めたバス路線の発達である。これには小型から大型まで何段階かあるが、小型のものは、中古ライトバンを利用して10人ばかりの客を詰め込み、大まかに定められた路線を突っ走り、客の望む所で降ろして行く。運転手と組んだ呼び屋がいて、大声で行先を叫んで客を誘う。これは都心ばかりでなく郊外でも発達していて、土地の人々はそれを乗り次いで100km以上の旅を安価にやり遂げる。この小型の乗り合いタクシーは通称をコルトと呼んでいるが、もともとは日本製の三菱コルトを使った所から出た名前と聞いた。このジャワのコルトは少々荒っぽいのでそのままと言うわけにはいかないが、経営難と公共サービスの狭間に落ち

込んでいる日本の都市バスにはひとつの示唆になるだろうと言われている。

さて、ジャワの都市交通の実感をひと言でいうならば、伝統的な街道と宿場の交通をそのままなしくずしに都市化し自動車化したものでも表現できようか。その良さも悪さもやはりアジア的なものに根差しているのである。

### 食について

ジャワの街に住む普通の人々の生活時間の実態について調べてみて、ひとつ興味深い傾向があることに気が付いた。それは家族の全員の食事時間にかなりバラつきがみられる点である。一日のうち、自分の家で過ごす時間が比較的永いにもかかわらず、一家族がそろって食事をし、食事を通じて家族がだんらんをする形のホームライフはあまり行われていないようである。

彼等の食事は、基本的に個人が必要あって食うことであって、必ずしも家族に結びついたものではない。それはむしろ街の生活時間全体にとけこんでいて、通りの屋台や路上での食事などのストリート・ライフの繁盛に結びついている。

私たちの調査には、バンドン工大とガジャマダ大学の建築学生諸君が数名協力してくれた。その労をねぎらうために、私の主催で一泊、ジョクジャカルタのレストランで所謂コンパをやることにした。もっとも彼等の多くはイスラム教徒で飲酒を禁じられているので、酒を飲んだのはほとんど日本人だけではあったが。

学生諸君は大いに喜んで参加をしてくれたのであるが、席上の話では、このような会食を通じての交歓は全く初めての経験だと言うのである。面白いのでこれからも時々やってみると彼等は言っていた。それが良いことなのかどうか、私は今もって自信が持てないでいる。

### 影絵芝居の永い夜

ジャワの代表的な伝統芸能に影絵芝居ワヤンクリがある。日の入りから明け方まで、ガムラン音楽に導かれながら、その終わりのない善と悪の相克の物語は延々と続くのである。その間

に使われる影絵人形の数も数百にのぼるであろう。そして、その間に語られる話の数もまた何百かになるであろう。善が悪に勝つ時もあるがそれで悪が減るわけではない。悪はまた新しい生命を得、時には善を追い払うこともある。歴史は全て、善と悪との終わりのない出会いな

のであって、この世もまたそのひとつの物語を綴っているひとつの間にすぎないという思いを見る者すべてに抱かきずにはおかない不可思議な力が流れている夜であった。

ここにも意味深いアジアの姿があると言わなければならない。



## 限りある資源を大切に…… の姿勢を守るDNT

現在は、“鉄の文明”と評され、今日の世界から鉄を無くしたら、恐らく一切の文化は終息するだろうといわれています。

DNTは、創立の礎となった重防食塗料「ズボイド」を通じて既に半世紀近く私たちの大切な鉄を守りつづけてきました。

そして、これからもDNTはズボイドを生みだした重防食技術をベースに、独自の技術開発を進め、さらに、海外の優れた技術と協力しあって、より優秀な重防食システムとして結合させ、限りある資源を守りつづけていきます。

●創造と調和をめざす●

**DNT**  
大日本塗料

●大阪市此花区西九条6-1-124  
〒554 ●(06)461-5371(大代)  
●東京都千代田区丸の内3-3-1  
〒100 ●(03)216-1851(大代)